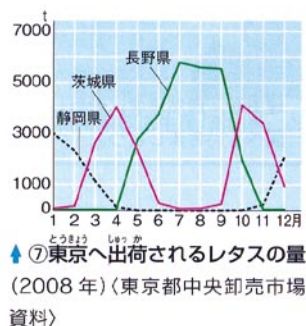


とに学習を展開すれば、「レタスやキャベツ・白菜のマークと関係があるんじゃないかな。」「野菜集荷場というのが3つもあるよ。」という情報と結びつくだらう。そうした場面で、中学校社会科地理の教科書などにある「市場に出荷される月毎の産地別出荷量グラフ」を提示すれば、夏の時期に野辺山原のある長野県の出荷量が断然多いことに驚きを感じ、茨城や静岡との出荷時期のズレの意味を追究する学習に発展していく。野辺山原の野菜づくりが、冷涼な気候を利用し他の産地で生産が少ない時期に野菜を出荷できるため、野菜の価格を維持して販売できる利点に目を向けさせることができる。

図2 『社会科中学生の地理』p.213



その際にも、p.31②から読み取った情報「東京と野辺山の8月の平均気温」や「スキー場があること」「JRの最高地点(1375m)」「別荘地がある」など、子どもたちの「気づき」をつなぎ合わせながら、夏涼しい野辺山の気候について理解させていきたい。

地図帳p.31②の主題図は、野辺山原一帯の自然条件や社会的条件を読み取れる豊富な情報を含んだ地図である。

4 「運輸の動き(流通)」の視点から

「野辺山原で収穫した野菜は、どのようにしてスーパーマーケットや八百屋さんまで運ばれてくるのだろうか?」という問いに対しては、地図から読み取れる「トラック」という答

えが返ってくるだろう。あるいは、小海線を見つけ「鉄道」と答える子どもがいるかも知れない。現在、高原野菜は「トラック輸送」によって運ばれているが、1970年代までは鉄道による「貨車輸送」が主力であった事実と照らし合わせれば、「鉄道」と答えた子どもの気づきから運輸形態の変遷を学ぶきっかけにできる。

新鮮で良質なものを消費者に届けるための運輸の働きについて、40年前と現在のトラック輸送を比較しながら、集荷場の予冷施設や専用の保冷トラックでの輸送体制(コールドチェーン)が確立されてきたことを理解させることができる。

野辺山原で収穫された高原野菜は、おもに首都圏・中京圏・京阪神圏および九州の各地域に出荷されている。首都圏・中京圏には3~4時間、阪神圏へは6時間、九州の福岡へは12時間程度、鹿児島へは17時間をかけて高速道路を利用して運ばれていく。玉川大学の寺本教授が推奨する「指旅行」で野菜の輸送経路をたどる活動を行えば、地図帳を活用して整備された高速道路網を確認することができる。



昭和49年と現在のトラック輸送(左写真提供:高見澤武史氏)

5 おわりに

地図帳を活用しながら野辺山原の高原野菜づくりの学習展開例を示してきた。子どもたちが地図に含まれた情報を読み解き、「気づき」からその土地の風景を思い描き、自然のようすや人々の暮らしについて考えを交流し合う楽しい社会科授業を実践していきたい。

※本論文は、寄稿いただいた論文の抄録です。原文全体は弊社HPに掲載いたします。